盛岡城日記

祐清

Vol. 7　2023年12月

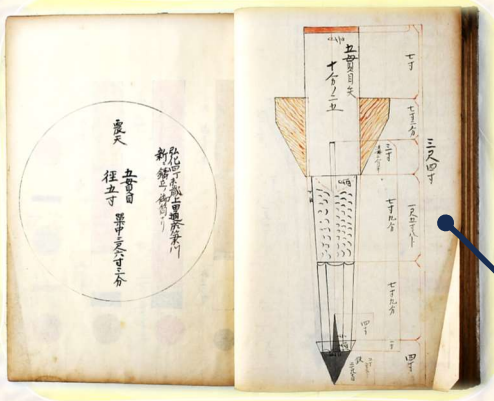
前回は広報もりおかでの連載と併せて、移築建物等調査について詳しくお伝えしました。今回は調査報告第二弾！ということで、これまでの史資料調査で確認された、昔の盛岡を知ることができる史資料の一部をご紹介します。

こちらは「産所膳部仕立」と題された書物の一部です。産所準備、誕生、生後七日・五十日・百日、お食い初め、七五三、元服などの子どもの成長祝いや御膳のしきたりが文章と絵を用いて綴られています。下の図は「喰初之膳」と「歯固之餅」を絵で示したものです。

御膳番のもとに残る史資料としては少し異質かもしれませんが、様々な武器について詳細に記された冊子も確認されました。

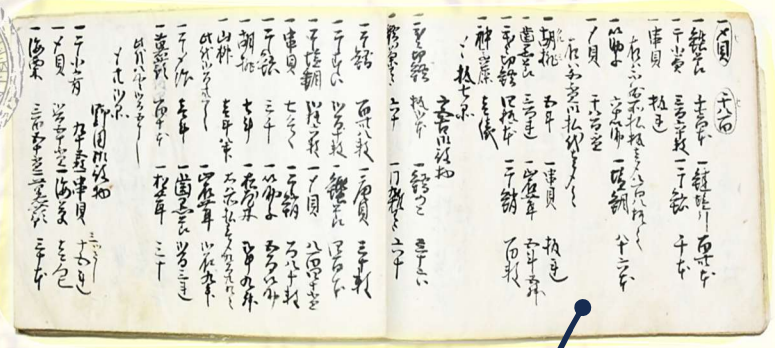
その中には「弘化四丁未歳上田通於簗川 新に鋳立の御筒ナリ」等の文言があります【左頁】。弘化4（1847）年には、盛岡藩の簗川においても、大筒（大砲）の製造が行われていたようです。

他にも、棒火矢（原始的なロケット弾）等の設計図、各種武器の組立図、砲弾等の図面などの記述が充実しており、ここからは、往時の盛岡藩が藩内で大筒を鋳造できる技術を持つとともに、各種情報収集を行い、戦への備えも怠っていなかったことが推察されます。



これらは直接盛岡城に関係する史資料ではありませんが、そこに昔の盛岡の姿が残る大切な財産の一つです。

盛岡城に関するものはもちろんのこと、盛岡の財産となるべき史資料とより多く出会えるよう、これからも日々調査を進めていきます。



今回掲載したのは、ある盛岡藩士の家系が所有する土蔵で確認された史資料です。その祖先は、御膳番（全君の食事を司る役職）として、城内で御料理方を務めていたと伝えられています。

こちらは、藩主への献上品等が記載された冊子の一部です。

この文書には、魚類（鮭・鱒・鯉）、鳥類（鶴・白鳥・雉子・菱喰）、きのこ類（松茸・椎茸）、海栗（ウニ）、串貝（串に刺して干したアワビ）、干瓢、昆布、胡桃などが献上品として記されています。今も高級品である松茸やウニ、アワビをはじめとした、私たちになじみのある食材に加え、鶴や白鳥、菱喰（池や川などで見かける カモ科の鳥）なども食材の一つとして扱われていたことがわかります。

献上元も、三戸・大槌・宮古・野田・野辺地・雫石・沼宮内・大迫など様々で、藩内各地の特産品が藩主のもとへ集まってきており、藩主はその品々を四季折々の風物詩として楽しめたであろうことが窺えます。

その他に、年中行事の献立なども記されており、これらの記録からは、往時の盛岡藩の営みの一端を知ることができます。

盛岡城小噺

第7話

＃盛岡城の「虎之事」

「盛岡城には虎がいた！」という逸話をご存じですか？これは、昔話のようなただの言い伝えではなく、盛岡城に関連する文献の中にも実際に登場する出来事です。

盛岡城の歴史を探る上でも主要な文献の一つに、「祐清私記」という書物があります。その中の「従二家康公一賜レ虎之事」という項目には、２代藩主南部利直が駿府で家康に謁見し、狩りの御供などをした際、「道阿弥の肩衝(かたつき)」という茶入と虎二匹を賜り、この虎は盛岡へ送られたという内容が記されています。
ちなみに、虎と一緒に賜ったこの茶入も大名物(名物と称される茶器の中でも最も由緒深く尊重される品)であり、南部家以外には主に徳川家と幕府の手にしか渡っていない非常に貴重なものであったようです。

ほかにも、盛岡城の虎に関する文献は多々あり、
・その虎はカンボジアから献上された虎だった
・檻は外曲輪にあり、二階建だった
・一匹が檻から抜け出し、鉄砲で打ち留められた
・その虎の毛皮を参勤交代時に引き馬の鞍覆(くらおおい)にした
などのエピソードが描かれます(各々諸説あり)。

このように多数の記録が残されていることから、寅年・寅の日・寅の刻に生まれたともいわれる家康から授けられた虎が盛岡城で飼われていたというのは事実のようです。日本には生息しない虎を間近に見ることができた盛岡城、実は全国有数の稀有な場所だったのではないでしょうか!?

盛岡城復元調査推進室の取組の詳細は、市ホームページに掲載しています。
盛岡城に由来があると伝わる資料や建物等に関する情報などありましたら、
盛岡城復元調査推進室(019-613-7956)まで、情報提供をお願いします。